オルタナティブアートネットワーク2011

「マチヤイロ～新しく染まる町家～」

実行委員会

この冊子は、本年夏に開催された、展覧会“オルタナティブアートネットワーク2011「マチヤイロ～新しく染まる町家～」”の活動報告書です。

オルタナティブアートネットワークとは、使われなくなった空き家や店舗、学校や工場を活用してアートの発信地に変容させ、それらの間にネットワークを構築していく活動です。昨年は金沢市芳斉地区の真福院を会場としましたが、本年は同じ芳斉地区の松本染物店と武蔵地区の金沢アートグミを結んで、8月20日から28日の9日間開催しました。

松本染物店は創業を江戸の文政期にまでさかのぼり、4代目の松本八十五郎氏が石川県染物商工業協同組合の組合長を務めるなど、盛時は着物を中心に友禅などの手染めの商品を取り扱っていました。しかし着物の需要が減るにつれて業務も縮小し、主力は染型を使った小紋へと移っていきました。そして約10年前、6代目の八十郎氏を最後に廃業しました。

松本染物店の建物は工房と住居が一体となった大型の町家形式で昭和7年（1932）に建てられました。この年は金沢アートグミが入っている銀行の建物が建設された年でもあります。銀行建築が金沢の重要な文化財であるのと同様、この大型町家も金沢に残る希少な建築物の一つです。現在ご家族が一人お住まいですが、本年中に空き家になることが決まっており、その後の存続が危ぶまれていました。

このような状況の中、金沢美術工芸大学の学生・教員有志が集まり、廃れていく町家をアートの力で染め上げたいとの思いから立ち上げられたのが、本展「マチヤイロ～新しく染まる町家～」です。松本染物店では提供していただいた場所に作品を制作設置し、蔵や工房に残された道具類や染額は運び出して金沢アートグミに展示しました。

この冊子には、作品、批評文、展示風景、染物店の見取り図、宣伝チラシ、新聞記事、参加スタッフの感想など、本展の活動記録となるものを掲載しました。

本展がアートの力を発揮して町家を染め上げることができたのか、ひいては町家の窮状を救う一助となりえたのか、展覧会を見て下さった方々の、またこの冊子を読んでくださる方々のご意見ご批判を頂ければ幸いです。

最後に本展覧会開催にあたり、場所や時間を提供するばかりか暖かく作業を見守って下さった松本耀子様はじめ関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成23年12月21日

オルタナティブアートネットワーク2011

「マチヤイロ～新しく染まる町家～」実行委員会

INDEX

3　概要

4　松本染物店の町家

5　展示作品と批評文

01 辻若奈《夢を見た日》　森田圭

02 吉田亜希《過客》　吉峰拡

03 吉峰拡《最後の見せ場》　森田圭

04 松本麻美《記憶を送る場所》　若山満大

05 畠山円《マチヤの落書き》　北早希

06 杉本花香《染物店の小人たち》　泉達也

07 大岡文乃《セッショク》　北早希

08 真鍋淳朗《マチヤガウゴク つながる町家の記憶》　川上明孝

22　各種リリース

27　メイキングと感想文

32　オルタナティブアートネットワークの意味

マチヤイロ

新しく染まる町家

［開催日時］

2011年8月20日（土）～8月28日（日）

10時～18時　水曜休館　入場無料

［会場］

松本染物店 ＋ 金沢アートグミ

［主催］

オルタナティブアートネットワーク2011 実行委員会

［協力］

金沢アートグミ

［広報協力］

長土塀中町会

［関連イベント］

ギャラリートーク　8月20日（土）10時～12時

［展示物品］

箪笥、長持、衣装箱、座卓、壷などの家財道具、金属製の湯のしの部品、伸子（しんし）、木製のローラーなどの工房道具および染料一式

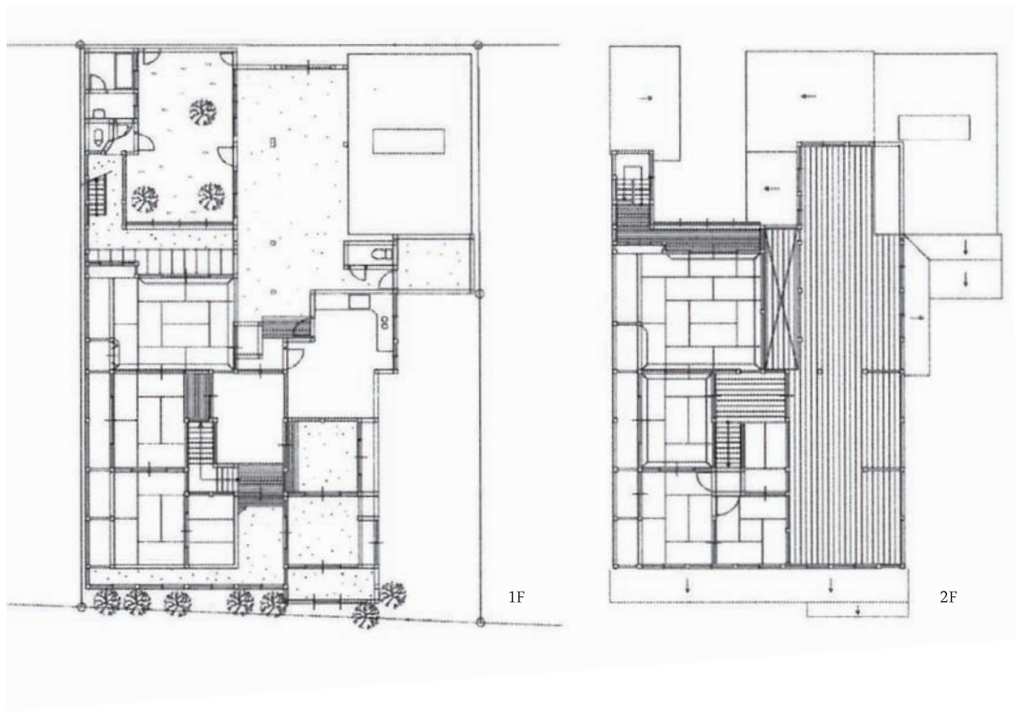
文様を布地に写すための染型

大量の小紋の染額

松本染物店｜金沢市芳斉1-4-28

金沢アートグミ｜金沢市青草町88番地北國銀行武蔵ヶ辻支店3階

松本染物店



松本染物店　延床面積 380㎡

松本染物店の創業は江戸時代文政年間(1818-1829)頃と考えられる。石川県染物商工業協同組合*1組合員（染色第一部）となり、4代目松本八十五郎氏は同組合の組合長を務めた。盛時は着物を中心に友禅などの手染の商品を取り扱っていたが、着物の需要が減るにつれて事業は縮小、主力は小紋の染額へと移行し、平成15年（2003）に6代目八十郎氏を最後に廃業した。

金沢市芳斉地区の現存の建物は昭和7年（1932）の建築で、工房と住居が一体となった昭和初期の貴重な大型町家であるが、ご家族お一人での生活であるため維持が困難であり、取り壊しの危機に直面していた。

本展「マチヤイロ～新しく染まる町家～」終了後、金沢美術工芸大学真鍋淳朗教授が中心となってアートスペースとしての活用が模索され、現在共同アトリエとして再生利用する計画が進められている。

*1 石川県染物商工業協同組合 金沢市高岡町22番28号

撮影｜品野與四寛

01 辻若奈《夢を見た日》
素材｜油彩、キャンバス
友禅小紋額の箱

染物店に入って玄関からすぐ見える位置にこの作品はある。見た人は瞬間、そこに人がいると錯覚するだろう。しかし落ち着いて見てみれば箱が積み上げられた部屋の真ん中に一枚の絵が置かれており、それが作品なのだとわかる。描かれた人物は手前の箱の中身を確認するようにふたを持ち、前屈みに正座している。人物の背後に掛けられている2枚の額は箱に収められていたものだ。今まさに仕事の最中に見える人物の仕ぐさは、箱に収められた商品がこれからどこかへと売られていくことを想像させる。

本作品の大きな特徴として部屋と絵の光景とが地続きであるように描かれていることがある。作家は展示空間と画面の中が自然につながって見えるよう絵の色味や大きさ、遠近感に気を払って描いている。またそれだけでなく照明を固定したり箱や家具の配置を調節したりと、部屋の見え方が画面上のそれと自然になるように空間を演出した。だがよく見ると、絵の中は現実の部屋よりも少し奥行きを取って描かれている。一見した印象では絵と部屋とが一体となっているように見えるのだが、絵の中には明らかに現実とは異なる世界が広がっているのだ。

そして、この作品を鑑賞する時にまず目に入ってくるのが積み上げられた箱の存在だ。大量の箱は松本染物店の商品である額装の小紋を収めていたものである。額は染物店営業時にはもともと店の倉庫にあったのだが、業務の縮小に伴って倉庫が売却された際に町家の一室に移された。やがて染物店は営業を終了し、それら商品は箱に収められたままついに一度も人の手に渡ることはなかった。いわゆる在庫品として40年以上ただ積まれた状態で安置され続けてきたのである。

箱はあくまで商品を収める容れ物でしかないが、本作品では額よりも本来付属的な部分である箱のほうが視覚的に強調されている。しかしそこに違和感はない。なぜか。それは長年梱包された状態でそこに置かれ続けたために、中身の額ではなく包まれた箱の見た目が部屋の風景と一体となっていったためではないかと私は考える。その場の雰囲気により馴染んでいたのは、商品である額ではなく表面を覆う箱のほうだった。

本作品をじっと眺めていると、見れば見るほど描かれた人物の動作がその場に溶け込んでおり、作品そのものが染物店という町家の中に取り込まれていくかのような感じを受ける。鑑賞者は画中の人物を介して作品に込められた想いをより強く感じ取る。染物店という場で違和感なく行われる彼女の仕ぐさは真摯かつ静かで、祈りの姿に似る。そしてそれが祈りであるならば、その祈りは積み上げられた箱たちに向けられたものだろう。町家という、作品の展示場所としては特異な場にあってなお放たれる作品の圧倒的存在感は箱たちに籠められたあふれんばかりの想いに起因するのだと思う。

絵画の世界と現実の空間を通して、あるべき役目を果たせずにいた箱たちの記憶が立ち現われる。作品に表されているのは箱たちの叶えられなかった「夢」である。それは人々の手に介され、役割を果たすという「夢」である。

森田圭

撮影｜品野與四寛

02 吉田亜希《過客》
素材｜絹、蝋、藍染料

《過客》はなんとも思いがけない場所に展示されている。それは玄関、それも頭上にである。その為、展示会期中は鑑賞者が会場内に入る時に自然に目に入ることは無く、むしろ会場を出る時に気づくという人がほとんどであった。作品は絹の反物に不定形な年輪をイメージした模様が染められている。

素材は松本染物店で使われずに眠っていた絹の反物、染色用の蝋、藍の染料。技法は蝋けつ染を用いている。これは、溶かした蝋を筆などを用いて布に塗り、模様を描く。それを染料に漬け染め、蝋を洗い落とすと模様だけが白く残るというもので、友禅でよく用いられる糊とは異なり微妙な"かすれ"を含むのがこの技法の特徴だ。

本来作品というものはそのモノ自体を見せる為、鑑賞者から見やすい場所に設置するものである。さらに、美術館などでは作品のみを鑑賞出来るように展示室には鑑賞の妨げになるものを排除している。その点では本作品の設置場所とその方法は対照的で、ともすれば不親切で不適切だ。しかし、ここではむしろこの場所に溶け込んでいて、良いと思わせるものがある。

玄関、つまり町家の出入り口に掛けられた布は、私には「のれん」を思い起こさせる。広告宣伝の機能を備えつつ空間を仕切る際に用いる「のれん」は、意識的に人の目を遮る。屋内と屋外の人間が出会う寸前の一呼吸とも言える存在だ。それは、顧客と商店との間では必要なことであったかも知れないが、美術作品の展覧会というものにとってみれば、単なる障害ですらあるかも知れない。しかし本作品は「のれん」の場を引用しつつも頭上に位置し、また布本来の「軽さ」や「装飾」という特性を生かしている為、鑑賞の際にも溶け込んでいる感覚を受けるのではないだろうか。

作者は松本染物店を訪れた際にその歳月や日本家屋の雰囲気、人の往来があったという事実、風が通る実感などを得たという。また本作品のタイトルである《過客》は、松尾芭蕉の『奥の細道』の冒頭の「月日は百代の過客にして」からとったと作者は言う。行き交う人々の折り重なる歴史を込めていると言えよう。

使われずにいた絹布は、藍色に染まり、風の通り道にたゆたう。過去にこの玄関を行き来していた顧客や友人たち、そして家族の気配。私にはそんな些細な日常の雰囲気とその歴史を表しているように思える。人の行き来によって生まれる風は、町家を吹き抜ける風と相まって《過客》を揺らすのかも知れない。

吉峰拡

撮影｜品野與四寛

03 吉峰拡《最後の見せ場》
素材｜布、木、電球

本作品は床の間を中心としたインスタレーション作品である。染物店の一室を利用し、複数の布を配置している。それら長い布が床の間を中心に伸び、その広がりは床の間が部屋全体に拡張していくかのような感覚を呼び起こす。布それぞれの色や柄は重複しないが、薄暗がりの中では細部は曖昧になる。天井・壁・床と面に伝うかのような布の配置は染物の工房で行われる作業の特徴から水の流れをも連想させる。そして布の要所には板状で不定形な木の造形物がいくつか置かれており、漆塗りのようなぬらぬらした光沢を放つ。それらは人の影や足跡を抽象化したかたちであり、この部屋にたしかに人々の生活があったことを思い起こさせるものだ。

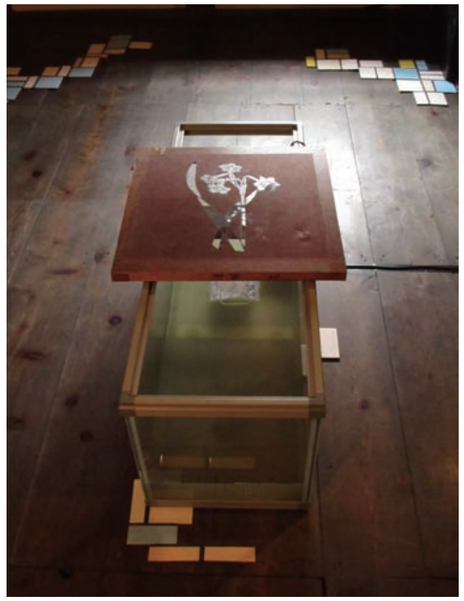
床の間は中世以降に発達した日本の建築様式で家の中での鑑賞・饗応の場であった。書院造の重要な要素のひとつである床の間は武家文化の成熟に連れて育まれたものであり、「床」とは部屋の中で一段高い位置を指す。邸宅に招かれた客はここで家主の歓待を受けた。作家の関心は「人をもてなす」ことにあり、作家が今回の町家での制作にあたり「床の間」という場所を選択したのもそのような関心に基づく。

展示空間へ足を踏み入れると感じる居心地のよさは、町家が持つ元来の魅力とともに、それを引き出す作家のもてなしの心によるものだろう。薄暗い部屋に入る。少し暗いな、と思う。布が伸びているのが見える。床の間に向かって正面に座る、このような一連の動作を行う時、鑑賞者はすでに作家のもてなしの中にあるのだ。この点において、室内が薄暗くなっていることは重要だ。現代の過剰な電気の光に慣れてしまった目には暗過ぎると感じるかもしれないが、抑えられた照明は日本家屋独特の静謐な雰囲気を醸し出している。

作家はこの作品で、染物店の「商売」の場という面よりも町家建築における人々の「暮らし」の場という面に注目している。床の間本来の役割からもわかるように、展示が行われた部屋はもともと客間であり町家におけるふれあいの場であった。それは祖父母と孫といった家族間の、ときに近所の人々も交じり合う家庭内外の交流の場であった。そこにはこの町家に暮らした「松本家」という家族を中心とした場の記憶がある。使われることのなかった反物、そして住む人々を失いつつある部屋が組み合わされることでそこに新しい場が生じる。住まいの役目を終えつつある部屋は、訪れる人々があらためてその空間を意識することのできる落ち着いた場として再構成された。≪最後の見せ場≫というタイトルからは、この部屋が自らの終焉を表明しているかの印象があるが、しかし住居として「最後」であるからこそ、この作品からはアートによる場の可能性を強く感じる。

森田圭

撮影｜品野與四寛



04 松本麻美
《記憶を送る場所》
素材｜ミクストメディア

染物店の蔵を使用したインスタレーション作品。床にはタイルを配し、中央には染物店裏の大野庄用水の水を張った水槽が置かれている。上には水仙をモチーフにした染型が乗り、水面には被写体が判別できないほど劣化した写真が浮かんでいる。側面の棚に配されたものは蔵の中に収められていたものである。釜やタライの金属部はややくすみ、箪笥に塗られた漆は枯れて亀裂が走っている。

作者は「建物に刻まれた記憶」を主題に制作を行った。ここで言う記憶とは、人の営みの痕跡のことである。作品が置かれた町家は昭和7年（1932）に建てられた。現在までおよそ80年の間、生活の場、生業の場としての役割を果たしてきた。蔵に残る食器や釜、蒸篭は生活の跡を如実に感じさせ、染型は脈々と受け継がれてきた業を想わせる。もはや用をなさない寂びられた道具だが、その中には未だ生気が宿っているようにも思われる。その生気とは人の営みの産物であり、人が道具に、あるいは建物に刻みつけてきた記憶に他ならない。作者が用意したこの空間で古びた道具を見るにつけ、我々は郷愁の念に導かれながら、在りし日の町家の情景に思いを馳せるのである。

作品に用いられているタイルと水(水槽)は、蔵の中にあったものではない。タイルと水はそれぞれ鮮やかさと瑞々しさを象徴し、古い道具類とは対照的な概念を表すものとして存在している。空間に彩りを添えるこれらの要素は、忘れ去られかけた町家の記憶が陽の目を見たことを示唆しているようである。

本作には緻密に作り込まれた観、換言すれば工芸的性質と呼べるものがほとんどない。一見すると本作には奥深さや味わいといったものが無いように思われる。しかし空間に配された道具類をひとつひとつ観ていくと、そこには固有の物語があり、技巧技術に依らずとも充分鑑賞に堪えうるものを我々に提示している。手仕事性を排することは必ずしも作品の価値を貶めることにはならない。道具類を再構成する試みは新しい価値、新しい見方を創出する手段である。本作は古びた町家に宿る記憶の存在を示し、鑑賞者が郷愁に浸ることを促している。この点において価値ある再構成の試みが成されているといえる。本作の最も有意義な点は、廃れていく町家を作品として昇華し、鑑賞者の意識に再現前させたことである。これによって鑑賞者は町家の価値を再認識する、あるいは自らの価値観を再考する機会を得るのである。我々にとってこの過程は必要なものであり、それを提供してくれる本作は価値ある空間と呼べるだろう。

若山満大

05 畠山円《マチヤの落書き》
素材｜油彩、水彩、和紙、
トレーシングペーパー等
撮影｜品野與四寛

階段の壁に、白、黄、赤の和紙が無数に貼られている。紙が漫画のコマとしての役割を持ち、1コマ1コマに絵が描かれている。元々の壁に描かれていた“落書き”のキャラクター達に作者が新しく命を吹き込み、落書きの続きを描き出したのである。

この壁だけに存在している名前も無い4人のキャラクター。今回作者が選んだのは、壁に直接鉛筆で描かれていた落書きだ。かつて染物店だった町家に足を踏み入れ、作品のモチーフに壁の落書きを選ぶという作者の着眼点に私は感心した。誰もが経験したことがあるであろう行為から生まれたキャラクター達は、見る者の笑顔を誘う。いたずら好きの男の子、働き者の女の子、世話好きな青年、気難しいおばさん…性格を付けて、まるでキャラクター達が自然に動きだすかのように1つ1つの話を作り上げた。

階段をのぼりながら壁に目をやると、1つ1つの話がリズムよく目に飛び込んでくる。物語中のキャラクターは生き生きとして見えながらも、和紙を使ったことにより温かさが生まれ、歴史のある町家の壁に馴染んで見える。また、その他の壁の落書きの線などに合わせて和紙が貼られており、目で追うのが飽きない。普通の漫画と違いしっかりとコマが割られている訳ではないが、和紙の色、切り方、配置の仕方により、物語をスムーズに追っていくことが出来る。和紙も染めたりインクを滲ませたりと加工の仕方を変えてあり、ぱっと見ただけでも壁から楽しさが伝わってくるのである。

「元の壁の落書きを見てからこの作品を見てもらって、少しでもクスっと笑ってもらえたら嬉しい。」と作者は語る。観覧者はまず階段に差しかかる時に壁に色のついた紙が複数貼られていることに驚き、その紙に描かれている絵が壁の落書きをモチーフにしたものだと知ってまた驚き、笑い、1コマ1コマを眺めながら愉快な気分になってく。展覧会でその様な場面を何度も目撃し、それを見ている私まで嬉しい気持ちになった。作者が壁の落書きをモチーフにしたことにより、観覧者の心と繋がったインスタレーション作品となったのだ。

北早希

撮影｜品野與四寛

06　杉本花香
《染物店の小人たち》
素材｜布、糸、木毛、和紙

松本染物店の2階へ上がると、そこには先代の主人が使用していた染物の工房がある。金沢の町家という伝統的な建物の中にある、染物の工房。今では誰も使う者の無いこの空間に、漂う不思議な気配…ふと気になって目をやると、工房の片隅に小人たちの姿が見える。彼らは何をしているのだろうか。こっそりと彼らの様子を覗いてみよう———

小人たちは3人おり、それぞれミシンのそば、棚の中、床に置かれた箱の上にいる。彼らはどうやら染物店の仕事の手伝いをしているようだ。皆白地の洋服を基調に、様々な色の衣装をまとっている。ミシンのそばにいる小人は紅色の服を着て、右手に糸を巻いたボビンを持っている。周囲には糸や布が置かれ、彼はまるで縫物を手伝っているようである。棚の中にいる小人は、青い服に花柄のエプロンを身につけている。彼女は糸を紡いで、糸巻きに巻いている。伏せがちな瞳は大人しくて聡明な印象を与える。床上の箱に座っている小人は緑色の服を着ている。箱の中には布切れや糸が詰め込まれてあり、彼が糸の山の上にのんびりと座る姿は、しばしの休憩を楽しんでいるようだ。

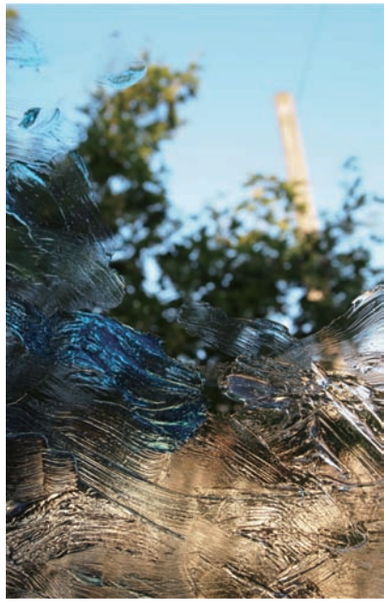
今回の展示において、杉本が小人たちをつくりあげたのは、ふたつのきっかけがある。ひとつは、彼女が以前から小人や妖精というような存在に関心があったことだ。彼女は幼いころからおとぎ話やファンタジーを好んだ。それらの中に登場する小人や妖精たちの姿が人間たちが持たないきらきらした美しさに魅かれたという。幼い頃は彼らの存在を信じて、枕元にプレゼントを置いていたりしていたらしい。ふたつ目は、彼女が故郷の札幌で見た人形作家・与勇輝の作品に感銘を受けたことである。今回、彼女は彼の作品を参考にしながら人形作りを行った。彼のつくる子どもや妖精の人形たちの愛らしさが、今回の小人たちのイメージにぴったりだと、杉本は感じたのである。

小人たちの身体や衣服に用いている布は、すべて松本染物店で使用されていたものである。髪の毛の糸も工房の棚の箱にあったものを使っている。彼らの頭と身体は、油粘土で成形したのち、石膏取りをして、型から外したものに布を張ったもので組み立てられている。腕と脚は型をとった布を縫い、中に木毛を詰めたものだ。それらをつなぎ合わせて小人たちはつくられた。顔は絵具を用いた手描きで、肌の色もそれぞれの色味をつくって着彩されている。縫製は手縫いとミシンの両方で行われた。

染物店で生まれ、染物づくりを手伝う小人たち。彼らは染物店そのもののように思われる。工房という空間は創造の場である。染物に使われる生成りの布や染料、薬品壺、そしてこれから使われるであろうミシンや布切れ、糸……これらは「ものを生み出す」源となるものである。杉本の目には、それらの周りに小人たちが人に気づかれないようにこっそり現れて、染物をつくり上げているように見えたのだろう。小人たちはいわば染物店にある材料・機材の持つ「創造性」の分身なのである。

今回杉本の小人たちは工房の片隅に現れたが、彼らは染物店のどこにでも現れる。染物店の至るところに漂っている、目に見えない創造の気配を「小人」の姿で表現した杉本の着想はとても素晴らしい。当初は5体の小人をつくる予定であったが、杉本にとって初めての人形作りであったこともあり、3体の制作にとどまった。十分な制作の時間をとれなかったのがとても惜しい。もしも5人の小人が現れたのなら、机や棚の周りは更に華やかになったであろう。もしかしたら、ほかの小人たちは私たちの気配に気がついて出てこなかったのかもしれない——

泉達也



撮影｜品野與四寛

07 大岡文乃《セッショク》
素材｜メディウム、アクリル絵具、飛散防止フィルム

町家の2階にある工房に上がり、外の風景を眺めようとする。すると、風景の中に色が広がっていることに気づく。青、赤、黄色…3色の絵具を混ぜた透過性のあるメディウムが、ガラス窓に直接塗られて色の広がりを作り出している。窓を閉め切った状態だけではなく、開けることによって色を重ねたりと、鑑賞の楽しみ方は様々だ。

金沢は雨が多いということと、展示場所がかつて染物を扱っていた町家ということから、作者は水を連想した。このガラスに表現されているのは水の流れなのである。それはガラスの表面だけではなく、床に置かれたビーカーも水流の動きがイメージされて配置されている。そうすることで、床から窓まで、窓際一体の空間をインスタレーションとして1つの作品にすることに成功している。

また、メディウムを混ぜて塗っていることでただの平面ではなく流れの中に立体感が付き、視覚的な色だけではなく、色に動きを与えている。そしてそれは作者自身の指で直接描かれており、よく見ると指紋が見える。その目に見える手仕事により、かつて染物店の工房であったこの場所と作品全体が調和しているように感じる。実際に指で色をなぞってみると、自分もその手仕事で出来た空間の一部になれた気がした。セッショクすることで、色の波に浸れるのである。

この作品を見る時、必然的に窓の向こうの風景も見ることになる。空、庭に植えられた紅葉の木々、屋根の瓦。窓に広がっている色々が外からの日光を含み、その風景に同化する。決して風景を邪魔しておらず、むしろ窓から見える風景を飾っているような印象を受ける。作者がその手で生み出した水の流れが、窓から見える風景を、1つの鑑賞されるべき景色へと造り変えたのである。色の流れは景色を背景として、その日の天候、時間帯によって映り方が変わってくる。私が初めてこの作品を目にしたのは、曇りの日の夕方であった。薄暗い中でもかすかな光を取り込んで、色が景色に溶け込むようなその様は心の中に残っている。作者は窓にだけではなく、窓から見える風景を含めた空間全体に装飾を施していると言える。また、窓を開けてガラスを2枚重ねることで、水流の立体感は増す。ぼんやりした色の流れとは別の表情が見られる。このように、色と色の重なり合い、光の反射。そういった偶然や、窓の向こうの景色とを含めて、観覧者はこの作品と心で“セッショク”するのだ。

北早希

撮影｜品野與四寛

08 真鍋淳朗《マチヤガウゴク つながる町家の記憶》

この展示は金沢市芳斉地区にある松本染物店の蔵や工房に残されていた道具類と染額を武蔵地区の金沢アートグミに設置したインスタレーション作品である。

全体は三つのパートから構成されている。入り口側の二つの壁面を覆う大量の染額群、中央の床に整然と並べられた道具類、そして奥の舞台に吊り下げられた染型のスクリーン、この三つである。

大量の染額が壁面を覆う様は巨大な壁画のようだ。特に入り口右手は天上まで埋め尽くして壮観である。金庫の扉も絵の一部として無理なくとけ込んでいる。近づいてみると、50cmほどの染額が規則正しく並べられている。すべて細かい文様を染めた小紋染め。図柄も一枚いちまい異なり、見飽きない。輸出用として作られたものであるらしい。

カラフルな壁から会場中央へ視線を移すと、そこは一転してセピア色の世界。蔵にしまい込まれていた大小の箪笥や長持、衣装箱や座卓、壷や徳利。そして工房に打ち捨てられていた木製のローラーや伸子（しんし）の束、染料の入った瓶、金属製の円柱の形をした湯のしの部品、端切れ、額を入れる段ボール製の小箱・・・。これらの道具がランダムに、しかし全体として矩形に納まるように巧みに配置されている。しかも道具空間に入っていけるように真ん中に通路が開かれている。周りからそして中から道具を眺め触れてみる。するとどこか懐かしい気持ちが込み上げてくる。

視線をさらに奥に向けると、そこには染型をつなぎ合わせたスクリーンが薄暗い舞台の境目から吊り下げられている。この染型も工房に眠っていたものだ。花柄や学校の徽章、店のロゴマーク、文字だけのものもある。形も大きさもまちまちだ。注文に応じて作られたのだろう。中には半透明の型もあるが、多くは焦げ茶色で生紙に柿渋を塗った伝統的な型紙である。舞台に上ると、模様がぼんやりと背後の壁に映り込んでいる。振り返ってみると、今度は光を通してくっきり浮かんで見える。スクリーンの特性を活かしたディスプレイだ。

このインスタレーションで作者はほとんど何も制作していない。ただ物品を並べただけである。しかしどれをどのように配置するかについては、上に見たように工夫されている。カラフルな小紋額、セピア色の道具類、焦げ茶に沈んだ染型のスクリーン。そして対面する小紋額と染型スクリーンは中央の道具類によって隔てられ、かつ真ん中に開かれた通路によって結びつけられている。このような空間演出を試みること、それがここで作者がなした仕事である。そしてこの演出に導かれて鑑賞者は物品の一つひとつを味わい、ありし日の染物店を心に描き、その息吹を感じることが可能となった。

作者は「マチヤガウゴク、つながる記憶の空間」と題をつけたが、そこには眠っていた品々とともに町家が立ち現れて人々の心に遠い記憶を呼びおこすことへの願いが込められている。そしてそれはまたこの展覧会に参加した全てのスタッフの願いでもあった。

川上明孝

※展示品概要

湯のし	1点	壺	4点	染型	23点
箪笥	8点	徳利	2点		
長持	6点	銚子	2点	染額（小）	419点（32.4×45.0cm）
衣装箱	2点	染布	複数枚	染額（中）	10点（41.5×56.5cm）
座卓	1点	伸子	複数本	染額（大）	16点（48.0×80.0cm）

道具類の一部はそれぞれ新たな持ち主に引き取られ、また小紋額も何枚か買い取られた。

大型町家の魅力紹介

「松本染物店」など20日から作品展示

金沢美大の学生13人は20日から、芳斉1丁目の町家「松本染物店」をギャラリーにする。室内にアート作品を並べるとともに、青草町のギャラリー「金沢アートグミ」では、染物店に眠る布地や染め型などを紹介し、染物店の80年の歴史を紹介する。

松本染物店は1932（昭和7）年に建てられた店舗や染色工房、蔵を備えた大型の町家。10年ほど前に店を閉め、現在、住居部分以外は使われていない。

「マチヤイロ　新しく染まる町家」と銘打ち、町家をアートの力で新たに染め上げたいとの思いを込めた。油画と彫刻専攻の学生らが町家を訪れて感じた印象から創作した。

染め物の額装が積み上げられた様子を描き、店先に置くことで実際の風景と混然一体となって感じられる絵画や、窓に透明な素材を張って色を塗り分け差し込む光で変化する色彩を楽しむ作品などが並ぶ。階段の落書きを取り込んだものもある。

町家での展示と併せて、20日から金沢市青草町のNPO法人「金沢アートグミ」のギャラリーで、学生らが町家の歴史をたどる作品展も始まる。染め物の道具や友禅小紋の額装、古い家具など約700点を展示する。額装は販売し、家具は希望に応じて譲る。

作品展はいずれも28日まで、入場無料。水曜は休館。問い合わせは金沢アートグミ＝電076・225）7780＝へ。

町家に眠る小紋を利用した額＝青草町のギャラリー「金沢アートグミ」

上　北國新聞

金美大生　差し込む光も素材に

染め物店を廃業した金沢市芳斉の町家で20日から金沢美術工芸大による作品展が始まり、店の空間や染め物の道具を素材にしたユニークな作品が会場を彩る。終了後は町家を工房としてアーティストに貸し出す計画があり、古い町家がアートを発信する場として再出発する。企画した同大の真鍋浮朗教授は「金沢の歴史を物語る町家から生み出されるアートを楽しんで」と話す。（押川恵理子）

【この記事に関連する旅】
「石川」の旅だより

会場の「松本染物店」は1932（昭和7）年に建築された。店主の松本八十郎（やそお）さんを8年前にとくし、妻の燿子さん（70）が一人で暮らすが「維持が不安」と引っ越しを予定。知人を通じて知った真鍋教授が「人が住まなくなると壊される恐れがある。町家が消えることは金沢の歴史が消えること」と活用を探り、今回の企画につながった。

作品展は「マチヤイロ　新しく染まる町家」と銘打ち、町家をアートの力で新たに染め上げたいとの思いを込めた。油画と彫刻専攻の学生らが町家を訪れて感じた印象から創作した。

染め物の額装が積み上げられた様子を描き、店先に置くことで実際の風景と混然一体となって感じられる絵画や、窓に透明な素材を張って色を塗り分け差し込む光で変化する色彩を楽しむ作品などが並ぶ。階段の落書きを取り込んだものもある。

町家での展示と併せて、20日から金沢市青草町のNPO法人「金沢アートグミ」のギャラリーで、学生らが町家の歴史をたどる作品展も始まる。染め物の道具や友禅小紋の額装、古い家具など約700点を展示する。額装は販売し、家具は希望に応じて譲る。

作品展はいずれも28日まで、入場無料。水曜は休館。問い合わせは金沢アートグミ＝電076・225）7780＝へ。

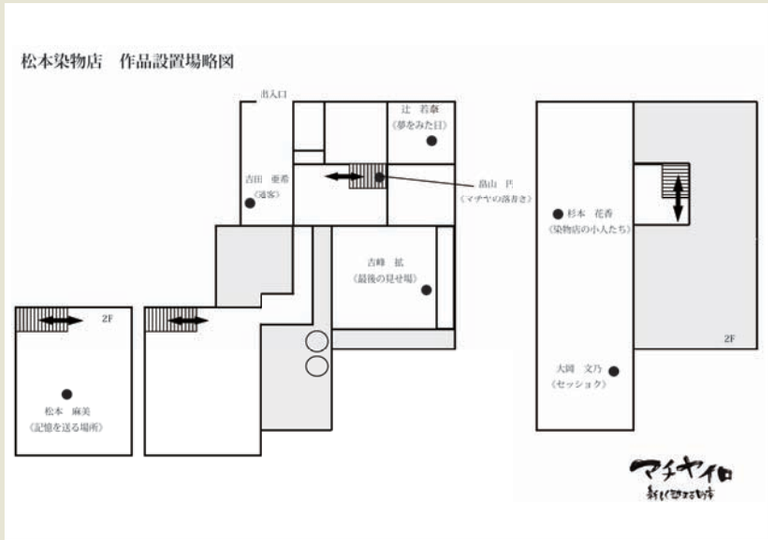
【上】アートを発信する場に生まれ変わる「松本染物店」の町家＝金沢市芳斉で【下】企画展に向けて金沢アートグミで準備を進める学生ら＝金沢市青草町で

下　北陸中日新聞

制作物 Productions

1

2



3

芳斉―武蔵を歩こう。

オルタナティブアートネットワーク２０１１
「マチヤイロ―新しく染まる町家―」の展示は、
芳斉町の松本染物店でも行っています。

オルタナティブアートネットワークは、
美術館やギャラリーなど本来アート作品が
飾られている場所ではない、
別の機能をもつ場所や建物を
作品展示の場として提案し、
その各地点をアートによって
繋げていこうという取り組みです。

今年度は芳斉町の町家、松本染物店を
新たな表現の場として提案し、
金沢アートグミとともに展覧会を企画
いたしました。本会場の金沢アートグミ
のみならず、松本染物店へも
ぜひ足をお運びください。

マチヤイロ
新しく染まる町家

4

1 A4チラシ
2 立て看板
3 松本染物店 作品設置場略図
4 芳斉-武蔵マップ

スケジュール Schedule

5月	
17日(火)	企画概要の検討。メーリングリストの作成・登録。
24日(火)	金沢アートグミ、真福院訪問。
31日(火)	オルタナティブスペース活用についての検討。金沢アートグミを会場とすることが決定。
6月	
7日(火)	松本染物店訪問。
15日(火)	松本染物店の会場としての利用についての検討・決定。他の講義との連携が提案される。
21日(火)	松本染物店訪問。松本染物店を会場として利用することの具体的な検討。
28日(火)	各作家の作品制作の構想についての提案。金沢アートグミ利用についての検討。環境デザイン専攻サークル「キケンタマゴ」からの参加についての提案。
7月	
5日(火)	芸術学専攻「複合表現論」(担当:エプリン・テプロフ・麦井非常勤講師)からの参加が決定。サークル「キケンタマゴ」のメンバーを交えて改めて参加を検討。
12日(火)	企画参加者を仮決定。作家と批評文執筆者の組み合わせを決定。
19日(火)	松本染物店での各作家の制作スペースの検討。松本染物店再訪問を検討。
26日(火)	松本染物店訪問。各作家の制作に用いる物品・スペースを確認。フライヤーの掲載内容を提案。
8月	
2日(火)	企画進行の大まかなスケジュールを決定。企画参加者がほぼ確定(学生11名、教員2名)。展覧会タイトルが“オルタナティブアートネットワーク2011「マチヤイロ〜新しく染まる町家〜」”に決定。プレスリリース案を検討。金沢アートグミの協力のもとフライヤー制作開始(担当:大岡)。
7日(日)	フライヤーおよびプレスリリースの文章案が決定。
9日(火)	参加者全員による松本染物店大掃除。
15日(火)	参加者全員による松本染物店大掃除。
16日(火)	金沢アートグミへ松本染物店の道具類を搬入。金沢アートグミの壁面整備作業。
17日(水)〜19日(金)	松本染物店での作品制作・搬入。金沢アートグミのインスタレーション制作。
20日(土)	10時からオープニング。松本染物店、金沢アートグミの順に、ギャラリートーク。
20日(土)〜28日(日)	展示期間。この間、希望者との松本染物店の道具類引取りの交渉が行われる。期間中の総来場者数は195名(1日当たり平均約24名来場)。
28日(日)	展示最終日(10時から18時まで)。18時より松本染物店は作品展示の片付け、金沢アートグミは壁面の額取り外し。
29日(月)	松本染物店の作品搬出。金沢アートグミの壁面額取り外しおよび壁面の釘穴パテ埋め作業。撤収作業終了後、近江町にて関係者打ち上げ。
9月	
17日(土)、18日(日)	松本染物店にて「町家巡遊2011プレイベント・おくりいえプロジェクト10」が行われる。
10月	
18日(火)	報告書作成に関する会議。
11月	
14日(月)	報告書作成に関する会議。

松本染物店
展示設営風景

左上　金沢アートグミ展示設営風景　　右上･下　松本染物店会場風景

今回、私にとって普段しないことをでき、とても貴重な体験でした。まず、町家に入ること自体が珍しく、染物店ということもあって、とても興味津々でした。工房の様々な道具は見慣れないものばかりで魅力的です。そしていつもは平面作品を作る私ですが、この場に合わせて人形を作りたいと思いました。はじめは上手くいかず、作業も遅いため芸術学の泉くんに手伝ってもらったり、彫刻の松本さんからミシンを借りたり、とても助けられました。それからは割とスムーズに進み、作るのをとても楽しめました。展覧会中は受付当番で町家に行くと、染物店の松本さんがいつも親切にして下さりとても有り難く思いました。更に、来て下さった方とお話をするのも貴重な体験で本当に充実したときを過ごせました。全員の協力があって展覧会が作れるというのも実感し、これからの創作もこれを忘れずに頑張ろうと思います。みなさんありがとうございました。 杉本花香（油画3年）

町家で制作した３日間は充実した日々だった。朝いつもより早起きして町家へ行き、絵を描く。お昼になるとおばさんがご飯を用意してくださり、それを有り難くいただき、また夕方まで絵を描く。私は部屋の空間と絵の中の部屋がつながるように実際の部屋でそれを確かめながら制作した。町家の部屋は夏の暑い日でも涼しい風が吹いてきて快適だった。私は居心地のよい部屋で集中して描くことができた。この部屋で昼寝をするととても気持ちいい。ところでこの部屋にあった売れ残りの箱たちは、私の絵で少しは報われたのだろうか。私は絵の中で箱たちの夢を描いたが、夢は所詮夢、であり叶えてはあげられてない。私は、絵のまわりを囲むように積まれた箱たちが悲しそうにみえてしまった。 辻若奈（油画3年）

初めて展覧会に出品者という形で参加させていただきました。先生方や展覧会に参加する学生のメンバーと毎週ミーティングを重ね、自分達の手で展覧会をつくっていくことを経験しました。作品をあらかじめ作って展示するのではなく、松本染物店での出会いと自分の表現したいことを合わせて作品を制作出来たのが意義深かったです。

松本さんには昼食を作っていただいたり、本当にお世話になりました。ありがとうございました。 畠山円（油画3年）

1日その場にいてみたいと思える場所で制作をすることが出来、幸いだったと思う。夏休みにおばあちゃん家に通うように染物店に足を運び、いとこと話すようにみんなで掃除をし、ご飯を食べ制作をした。私にはこの展覧会の活動は、今では少し希薄になってしまった家族みんなでする行事ごとのように感じ、とても面白かった。凄くアットホームな温かい場所と人に囲まれ、のびのびと制作をすることが出来た。また、展覧会に訪れるご近所さんやお客さんの町家についてのお話が、人と場所と時間を結びつけ新しいつながりになっているように感じた。町家という場所がそうさせるのか分からないが、人とのつながりの良さを改めて実感する展覧会になったように思う。 大岡文乃（油画4年）

人が何年も住んできた建物。そこには独特の空気が染みついており、それを感じながら制作できたのはとても貴重な経験でした。また、たまの松本さんのお孫さんとの会話や、作業中御馳走になる松本さんの料理、そして気遣いがとてもありがたく、それが制作の励みになりました。

制作をした場所、松本染物店の建物は無くなってしまいますが、味わった空気感はこれから先も忘れません。 松本麻美（彫刻3年）

町家での展覧会は、洞窟の中で宝物を見つけるような、そんな不思議な体験でした。私にとって、今は誰も使うことのない場所を、新たにアートを発信する場所に変えるという試みや、作品に対する本格的な批評も初めての経験であり、終始発見の連続でした。正直、右往左往の繰り返しで、今振り返るともう少し頑張れたところもあったかな、と心残りも多々あります。

それでも松本染物店とアートグミですごした期間はとても楽しく、未だに夢を見ているような不思議な感覚です。それにしてもアートグミでの額の取り付けは疲れた…！ 泉達也（芸術学3年）

１つの展覧会を一から作り上げるということ。それは大きな作品を皆で作り上げるような感覚だった。ああでもない、こうでもない、あれがしたい、これもしたい。参加者全員の頭の中で「マチヤイロ」が徐々に彩られ、作り上げられていった。油、彫刻、芸術学…専攻を越えての展覧会準備は刺激があり楽しかった。インスタレーション作品が多いということで、搬入期間まで作品の実態が無いというのは少し不安があったが、展覧会場である松本染物店と金沢アートグミに作品が現れていく様子は、まるで布が一気に染められていくようであった。作家は個々の作品を作っているのだが、全員が１つの展覧会に向けて動いているのが感じられて良かった。みんなが同じ色に、それこそ“マチヤイロ”に染まっていっていたと思う。 北早希（芸術学3年）

私は芸術学専攻として今回の展覧会に企画の側で参加しました。どの展覧会でもそうだと思うのですが、振り返ってみると本当に多くの方々とのつながりがあってこその開催であったと思います。とくに今回は町家会場の提供者である松本耀子さんがまだ生活なさっている中での開催ということで企画の段階から多大なるご厚意を頂きました。そしてアートグミ会場においても、時間に余裕のないスケジュールにもかかわらず不自由なく企画を進めることが出来たのはスタッフの方々の惜しみないご協力のお陰です。また真鍋先生、川上先生には授業の枠を超えたご指導を頂きました。そしてそして、何よりあの場でしか為し得なかったであろうすばらしい作品を生み出したつくり手の方々には心から尊敬の念を捧げたいです。くわえて、私にとっては一番身近なところで作業をともにしてきた芸術学のみなさまにはもはやお疲れ様ですという以外の言葉が浮かびません。最後に展覧会にかかわった全ての方々に向けて、この場を借りて感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました！ 森田圭（芸術学3年）

本展覧会は町家での金沢美大の学生による作品展示が一つの核をなしていましたが、私はそこで批評と作品展示の二つを経験させて頂きました。展覧会の大枠を決定することにこそ関われませんでしたが、展覧会の作品設営や出展作家とのインタビュー、ディスカッションなど、自分の専攻内だけでは絶対に経験できないことを経験し、学ぶことが出来ました。個人的には搬入の際の「お祭りの前夜」という感覚がとても好きで、やらなきゃならないタスクに追われながら一人で愉しんでいたりしました（笑）。松本染物店の松本さんや金沢アートグミの皆さん、関係者の方々には大変お世話になりました。 吉峰拡（芸術学3年）

町家を提供してくれた松本さん・作家・スタッフ・来場者の方々など、様々な人々が展覧会を通じて交流できたことが最も有意義であったと思います。人の輪を作り出すこと。これもアートの可能性のひとつなのだと実感しました。最後に展覧会に関わってくださった多くの方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。 若山満大（芸術学3年）

聞こえる声、馴染んだ音、感じられる風の匂い。

格子窓の外には晴れた空と乾いた通り道。

古い日本家屋は開かれた空間である。作品は家屋の中を通り過ぎ行く時の流れ、訪問者、風をイメージして作った物だ。使用した布は染物店に残されていた絹布を用い、技法は伝統的な蝋結染めを用いた。やわらかな自然光の差し込む玄関は開放的な印象で、町家の長い歴史の中で訪れる人々を優しく迎え入れ続けてきたのだという事が感じ取れる。私はこの場所にこそ自分の作品を展示するのに相応しいと思った。

町家の空間を使用した今回の展示で、一番肌で感じたことは人との繋がりである。長い歴史の中で生まれた人と建物との結びつきは地続きであり、その線上からまた新たな創作、アートが生まれる。私は町家の新たな歴史の通過点に一つの繋がりを残すという貴重な出来事に携わる事ができ、とても嬉しく思う。 吉田亜希（芸術学4年）

オルタナティブ アート ネットワークの意味

オルタナティブ アート ネットワークとは、既存のものごとに取ってかわる新しいものごとをアートという方法で生み出し、その結果生まれる創造的な場を結びつけてネットワークを構築していく試みで、現代アートの文脈と連関する要素を多く内包しています。

今回の「マチヤイロ～新しく染まる町家～」では、金沢市芳斉地区にある松本染物店の蔵の中にあった長持、箪笥、衣装箱と工房にあった染め型枠、染色道具や材料と、廃業する前に生産されていた小紋を、NPO法人が運営している金沢アートグミギャラリーにおいてインスタレーションとして再構成し、染物店の記憶を呼び戻す展示を試みました。特筆すべきは、小紋を除く全ての道具類を希望に応じて観客に無償で譲ることにしたことです。これは既存のギャラリーや美術館に取ってかわる商業主義でも権威主義でもない新しい形の展示の在り方です。

他方、金沢市芳斉地区にある松本染物店では、金沢美術工芸大学美術科の学生が、既存のギャラリーや美術館のように展示を前提に作られたホワイトキューブではない、プライベートな日常の生活空間を場として展示を試みました。

学生達は、日常の空間をアーティスティックな非日常的な場へと変容させるべく、染物店内にある物や材料を取り込んで、その場でしか成立し得ないサイト・スペシフィックな作品を制作し展示しました。

存続が危ぶまれていた松本染物店の建物は、今回の展覧会が閉じた後、制作スタジオとして新たに活用されることが決まりました。銀行であったスペースがアートを発信する場に転用されている金沢アートグミギャラリーと松本染物店を連携させた今回の展示は、アートと社会との新しい関わりを表現する場としてのオルタナティブ・スペースの意義を再確認し、その可能性に希望を与えたように思われます。

このように、オルタナティブ アート ネットワークの試みは、日常生活のうちに新しい表現の可能性と人間性の再生をめざしアートと社会の関係性を問う最も先端的な動向のひとつであるリレーショナル・アートとも深く関わりつつ、社会とアートの新たな在り方を金沢というローカルな場から世界に提示していくことを意味しています。

真鍋淳朗

オルタナティブアートネットワーク2011
「マチヤイロ～新しく染まる町家～」展

スタッフ　〈金沢美術工芸大学油画専攻〉
杉本花香(3)、辻若奈(3)、畠山円(3)、大岡文乃(4)
真鍋淳朗(教授)
〈金沢美術工芸大学彫刻専攻〉
松本麻美(3)
〈金沢美術工芸大学芸術学専攻〉
泉達也(3)、北早希(3)、森田圭(3)、
吉峰拡(3)、若山満大(3)、吉田亜希(4)
川上明孝(教授)
※(　)内の数字は学年

助　成　一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
平成23年度金沢美術工芸大学特別研究

協　力　松本染物店、金沢アートグミ

同展活動報告書

編　集　上田陽子(金沢アートグミ)
撮　影　品野與四寛
発　行　2011年12月31日
同展実行委員会　(真鍋淳朗+川上明孝)
〒920-8656　金沢市小立野5-11-1
TEL 076-262-3524　MAIL manabeju@kanazawa-bidai.ac.jp